S 中尉の話

南部修太郎

青空文庫

「まあ皆、聞いて呉れ給へ。この僕にもこんな話があるから面白いぢやあないか……」

と、B歩兵聯隊附のS中尉が話し始めたのです。かう云ふと、定めて戰爭の手柄話でも聞かされるのかと、お思ひになるでせう。處が大違ひなんです。この間Mの家で、一昔前のA中學校の卒業生だつた我我五人が、久し振りに落ち合つた時の話です。五人と云つても、Mはもう法科大學の四回生ですし、Yはある商店の番頭でお召ずくめかなんかでをさまつてゐますし、Hは高工を出て或る造船所の技手、それにS中尉と、私だつたのです。勿論五人の間には昔ながらの親しみと、寛ぎとがありました。然し、姿形から云ふともう見違へる程大人びて、腕白な中學時代の面影は殆ど何處にもありませんでした。

寒さの隨分嚴しい晩でしたが、しつきりなしに喫かす煙草の烟や、Mのお母さんの心添への伊太利亞ベルモットの醉ひに、皆の顔は赤く染まり、何となく座が浮き立つてゐました。それに何と云つても血氣盛りな、若若しい人達の集りです。自分の生活や爲事の話、行先の希望、人生觀などと話題に興が乘つて、やがて結婚や女性問題が話の中心に進んで來た時です。

「どうだい。久し振りの罪滅しに戀愛に關する告白をし合はうぢやないか……」

と、座の一人が提議しました。

「賛成、賛成……」

と、調子づいてゐた皆は、直ぐにその提議に和したのです。

初めの話手はMでした。彼は法科大學生らしい口調と、少し眞面目過ぎるやうな態度である年上の女との戀を語りました。次に商店の番頭のYは、非常にセンチメンタルな調子で、ある娼婦と心中未遂に到るまでの捨て鉢な戀の告白をしました。其處には流石に世間の苦勞を嘗め盡して來た男らしい眞實味がありました。温厚で、純で、そして一番年弱だつた技手のHは、少し顔を赧らめながら、或る海軍將官の娘に對する片戀の痛みを物語りました。非常にはしやいでゐた一座がだんだんに沈んで來て、中にもHは自分の話半ばに眼に涙を溜めてゐました。

「どうも皆はなかなか話が豐富なんだな。」

と、四番目の話手に當つたS中尉が頭を掻きながら云ひました。

山の手の屋敷町にあるMの家は、募つてくる夜の寒さに軋む雨戸の音さへ身に染む程の靜けさで、殊に主屋と離れたMの書齋は、家人との交渉もなく、思ひのままに話は進むのです。そして夜も大分更け渡つてゐましたが、皆は時の移るのも忘れ勝ちでした。時時、遠くから交叉點を横切る電車の響が、鈍く、寂しく聞えてくるのです。

「さあS、君の番だぞ……」

と、自分の物語を終つたHは、煙草の烟の輪を吹きながら興奮した面持でせき立てました。

「皆の話が馬鹿に詩的なんで驚いたよ。おまけに後は君だらう……」

と、S中尉はピンと撥ね上げた、少し貧弱なカイゼル髭を撫でながら、私を見て皮肉に笑ふのです。

「馬鹿あ云ひ給へ。君にだつて君の領分があるぢやあないか……」

と、私も笑ひ返しながらせき立てました。實を云へば、皆の眼の一致する處、一座の中でS中尉が一番さうしたことにOut of the questionらしかつたのです。もつと皮肉に云へば、皆は其故に一そう彼の物語を期待してゐました。で、彼が頭を掻きながら無骨な、而も困りきつた様子で逡巡すればするだけ、四人の心の中には一種の好奇心が湧き立つてくるのです。こんな心持は誰しもあることでせう。どんなに親しい人達の間にでも、特にそれが親しければ親しいだけに強く起つてくる、一面から見れば隨分人の悪い惡戯氣分がS中尉を對象にしてそそり立てられて來たのです。かうなると、今まで少し沈んでゐた一座の空氣の中に、或る上つ調子な氣持が漂つて來て、四人の眼は意地惡く、S中尉の練兵燒けのした淺黒い顔にそそがれ始めました。へどもどするのはS中尉だけです。

「おい、夜が明けるぞ……」

と、口の惡いMは叫びました。

「まあ待てよ……」

やがてグラスを取り上げて、ベルモットに咽喉をうるほしたS中尉は、てれ隱しにバスの聲を一聲かう張り上げたかと思ふと、勿體らしく話し始めました。が、その顔には當惑らしい苦笑が絶えませんでした。

「どうも戀物語と云つちやあ、僕のは少し可笑しいんだ。」

「結構、結構……」

と、一人が囃し立てました。

「さう半疊を入れるなよ。とに角まだ一月ばかり前のほやほやな話なんだ。何でも四谷の大番町にゐる友達を訪ねて、僕が大通りから九段兩國行の電車に乘つたのは丁度夜の八時過ぎだつたと思ひ給へ。中は好い工合に空いてゐて、釣革にぶら下がつてゐる人もなかつたので、僕は直ぐ中程の座席の隙へ腰を降したんだ。友達の家で飲んだ酒の醉ひはまだ醒めてゐなかつた。處でひよいと顏を上げて筋向うの座席を見ると、馬鹿に綺麗な女がゐるぢやあないか。而もその途端に向うも此方を見て、ぱつと視線がぶつかつたのさ……何しろその時、僕ははつと思つたよ。二十三四の女盛りで、艶艶した庇髪の陰から覗く、黒味勝ちな眼に馬鹿に charm があるんだ。何と云ふのか知らないが、服裝も素敵に凝つてゐたよ。」

「此奴あ、面白い……」

と、Yは慓輕に膝を乘り出しました。

「とに角すつかり僕は氣になつてしまつてね、電車が止まつてまた動き出す、ひよいと向うを見ずにはゐられなくなる。處がまた妙に向うが此方を見るんだ。そして拍子を合せるやうに視線がぶつかる。まるで無線電信の火花さ。僕も初めの二三度こそきまりが惡かつたが、そんなことを繰り返してゐるうちに、とうとう仕舞ひには大膽になつて來て、ぢつと見詰めてゐてやつた。處が向うも負けないんだから、尚不思議なんだ。そはそはしてるやうな處があるかと思

ふと、厭やに落ち着いた著いた處のある女なんだね。」

「ははあ、Sの奴、ひと眼で女に參つてしまつたな。」

と、恐らく四人の聞き手はさう思つてゐたでせう。S中尉はだんだん眞顏になつて來ました。

「で、僕は腹の中で考へたね。此奴高等淫賣かなんかかな——と。處が女の著物の趣味から見ると、さうも思へないんだ。それに第一自分を考へて見ると、どう自惚れたつて、そんなものに見込みを著けられさうな御人體ぢやあないんだね。さうなると此方は少し弱味で、いささか薄氣味が惡くなつて來た。が、相變らず眼と眼の偵察戰は絶えないんだ。そのうちに電車が四谷見附に近づくと、女は降りる樣子なんだ。而も欲目かは知らないが、變に此方を誘ふやうな素振りを見せるぢやないか。」

丁度その時、十一時が打ちました。然し時計の音なんかは、皆の聽覺の中には這入りませんでした。

「さあ其處で、糞つ——と、僕が度胸を極めたから話が面白くなるんだ。尤も其處からなら番町の下宿までさう遠くもないと思つたし、それに何と云つても酒のつけ元氣さ。で、電車がぎいつと止まつて、女が降りたのを見ると、僕はわざと運轉手臺から降りたんだ。處が君、女の樣子を見ると、僕の降りたのをちやんと知つてるらしいんだ。そしてすたすたと舊見附の方へ這入つて行くぢやあないか。僕は流石に氣がさしたので、新開の鐵橋の方へ歩きかけたんだが、そのまま樹蔭から女の後姿を見てゐると、やつぱり此方を振り返り振り返りするんだ。其處で

とうとう第二の決斷は僕をして、舊見附の方へ足を進ませるに至つたんだね。」

「S中尉冒險（アバンチウル）の始まり……」

と、誰かが思はず聲を擧げました。

「何だか咽喉が渴いたよ。」

と、少し調子づいて、喋舌（しやべ）り續けてゐたS中尉は、その聲にふいと言葉を途切つて、一すすり番茶をすすると、また始めました。四人の眼が好奇心に輝いてゐたのは云ふまでもありません。

「女は舊見附を越すと、あの松の生えた濠端（ほりばた）の、暗い、寂しい道へ平氣で這入つて行くぢやあないか。君、考へて見給へ。夜の九時時分にさ、あの人つ子一人通らない暗闇を、若い女だてらに一人で歩いて行くんだぜ。この大の男でさへ後を著けながら、内心びくびくせざるを得なかつたくらゐだよ。が、此處ぞと勇氣を附けて、足をいささか早めたんだ。すると女は確に歩度を緩めるらしいんだ。とうとう濠端の道を十五米突も行かないうちに、二人は擦れ擦れになり出した。處が、やがて女は不意に足を止めて、振り向いたかと思ふと、落ち著いた聲で訊ねるんだ。

『何か御用で御座いますの……』

僕は大にどぎまぎした。

『いいえ、用があるわけぢやあないですが、あなたが大變綺麗な方だつたもんですから……』

確に變てこに硬くなつてゐたよ。が、笑つちやあいけない、平生ならとてもこんなことが白面で云へたもんぢやあないさ。處が驚くかと思ふと、

『まあ……』

と、女は優しく、そしてCoquettishな聲を暗闇の中に響かせた。で、

『少し歩かうぢやありませんか。』

と、僕は思ひきつて云つてのけたんだ。

自分でも、自分がだんだん大膽になり行きつつあることははつきり分るんだ。然し、白状すれば、女の方が確に役者は一枚上だつたね。で、僕にして見れば、それだけ女の生體を掴まうとする好奇心が波打つてくるわけだ。それに君、風はなかつたが、凍るやうな寒い晩で、澄み切つた空には星がぴかりぴかりやつてゐるのさ。とうとう不思議なspazieren zu gehenが始まつたんだ。」

「今夜の傑作だ……」

とぢつと聽き入つてゐたHが、少し紅味を帶びた、輪廓の整つた、品の好い顏を上げて呟きました。S中尉の話には次第に油が乘つて來ました。

「まあ聞き給へ。それから初めに肩を並べてゐた二人が、次に手と手を握り合ひ、やがて肩から腰へと手を掛け合つて、身を寄せて、あの濠端の暗い道を二時間も行き來して、語り續けたんだ。ちよいと見て高等淫賣と見極めをつけてゐた僕は、初めのうちはありふれた世間話でお

茶を濁してゐたが、そのうちに女はだんだん眞劍になつて來て、まるで僕を戀人のやうな位置に置いて、細い身の上話を始めるんだ。それが非常に筋道が立つてゐるし、殊に親身なんで、とても疑ひを挾む隙さへないんだ。聞き手の僕自身さへ身につまされて、何だかセンチメンタル——さうだ、さう云ふ言葉があつたね。つまりセンチメンタルになつたんだ。なんでも女はT女學校の出身で、家は目白だとか云つてゐた。そして十九の時かに、下谷邊のある株屋の家へ嫁いだのださうだ。初め夫は非常にその女を愛してゐた。で、翌翌年かに男の子を産んだ處が、不幸にして半年目かにそれが疫痢に犯されて、とうとうK病院で死んだんださうだ。すると、もうその時分から夫の彼女に對する愛情は冷えてしまつて、藝者狂ひは始めるし、家では姑にいびられて、とどのつまりが離緣と云ふのさ。全く可哀想になつたよ。そして僕がしんみり聽いてやつてると、繰り返し繰り返し夫や世間に對する怨み言を訴へたり、女は弱いものだ——なんて云ふんぢやないか。

『世間て、どうしてこんなに薄情なんでせうね。私程不幸なものはない——と、時時さう思つて、悲しくなりますの……』

と、大に同情を求めて、仕舞ひには身を震はして泣き出すんだ。いささか持て餘したね。そして勿論はつきりしたことを云つたわけぢやあないが、僕が軍人であることをほのめかすと、

『軍人の方は頼もしい。』

などと云つて、僕の手を執つて、何度か接吻したりするんだぜ。そして君、ぴつたり凭せて

ゐるその柔かい肩の肉から、泣じやくりが僕の體に傳はつてくる氣持なんてないんだ。とに角狐につままれたと云ふにしても、話があんまりうま過ぎるぢやないか。

『今夜はどうしたんです。』

と、僕が聞くと、なんでも今はその濠端の或る華族の家へ、臨時の奥女中とかに雇はれてゐるのださうで、その晩はちよつと自分の家まで行つた歸りがけだつたんだね。そしてわざわざ自分の名前と、その雇はれてる家の電話番號まで教へて、用があつたら掛けろつてまで云ふのさ。驚いてしまつたよ。何しろ、あんな大膽——さう云ふのかな、大膽な女に會つたのはそれこそ生れて初めてなんだからね……」

「よくその晩、連れ出さうと云ふ氣にならなかつたね。」

と、Yが少しからかふやうな調子で云ひました。

「まさか、さうも行かないさ。此方が何しろ弱味なんだからね。それに僕としては體面もあるから、さう馬鹿なことも出來ないよ。さうさう、それから君、話の最中に自分の指輪を僕に遣らうとまで云ひ出したんだぜ。僕にはよくは分らないが、きらきら光る寶石入りで、それが安い物でなかつたことだけは確だ。然し、其處まで圖圖しくは流石になれなかつた。そして指輪は強ひて返したが、見も知らない他人の僕に對して、どうしてそんなことが出來るものか、分らないのは女の心持さ。そしてその晩は女がその家の門を這入るのまで見屆けて別れたんだ。」

「御苦勞様だね……」

と、Mは笑ひ出しました。

「まあ、もう少し聞き給へ。それから四五日經つてから、無論半信半疑で、その家へ電話を掛けると、間違ひもなくその女が出て來たんだ。で、その時打ち合せをして、或る處で出會ふ約束をしたんだ。その翌日だ。まさか來てやしまいとは思つたが、其處は欲目で行つて見ると、案の定ゐなかつた。さあ、さうなると、此方は未練があるだけに口惜しい、殘り惜しさが身を責める。堪らなくなつて、また五六日目かに電話を掛けると、もう二三日前に暇を取つて下がつたと云ふんだつた。がつかりしたよ。さうならさうで、女の家を聞いて置けばよかつたが、跡の祭さ。だが、全く皆に見せてやりたいやうな、垢抜けのした、charming な女だつたよ……」

さう、最後の詞を途切ると、S中尉は如何にも口惜しさうに溜息をして、口を噤んでしまひました。

私は彼の性格や、生活をよく知つてゐました。郷里に貧しい兩親を殘してゐる彼の生活は決して華かな、樂しいものではありませんでした。そして女なんかに縁のなささうな、忌憚なく云へば、戀の出來るやうな型の男ではなかつたのです。勿論、戀の出來ると云ふことが人間にとつて、それ程重大な事柄ではありますまい。然し、彼が時時私に打ち明けた内心の寂しさや、よそ眼にもそれと知れる心の焦燥は、頭の單純な男だけに、一面は其處にあつたと言はねばなりますまい。何しろ若い generation にとつては、それが心の滿足と、慰藉の、見方によつては

重要な部分になると云ふことは、少くとも確な事實でせうから……。

「面白い話だ……」

と、叫んだのはYです。

「だが、其處でぽつんと糸のやうに切れた處が、極めて意味深長で好い……」

と、にやにや笑ひながら云つたのはMでした。

「意味深長かも知れないさ……然し僕にはこれが生れて初めての、オンリイ一つの戀物語と云へば戀物語だ。若い時の思ひ出にこれを大事にしまつて置くよ。僕はとてももう一生女に惚れられさうな男ぢやあないからね。」

と、S中尉はやがて諦めたやうに云つて、寂しく笑ひました。

面白がつて聞いてゐた三人も私も、ふいと下を向いて口を噤んでしまひました。そして、暫く變にあらたまつた沈默を續けました。

勿論、その時の皆(みんな)は、S中尉のプウアな戀物語を暗に嘲笑してゐたのではなかつたでせう。また、必ずしも自分自らがたつた今打ち明けた、銘銘の戀愛の經驗と云ふものをS中尉のそれに較べて、それ程誇るに足るだけの幸福とも亦、愉悦であつたとも感じてはゐなかつたに違ひありません。寧ろ或る者は、S中尉の卒直な、飾りつ氣のない物語を聞いて、若しさうだつたとすれば、少くとも自分が自らの戀物語に對して加へた、故意の潤色や、或は假構の美化を内心恥ぢたいやうな氣がしたかも知れません。が、それよりもS中尉の前に影のやうに現れて、

影のやうに消えた女のことを考へて見ると、それぞれの戀の對象で嘗ては夢中になつて戀してゐた自分の女の行手が、頼りなく、寧ろ皮肉られるやうな心でふいと想像されたのではなかつたでせうか、女にとつては機縁さへあれば、男から男へと無反省に流轉して行くのはなんでもありますまいから。けれど要するに自分のそれも、S中尉のそれも、結局は大きな圓周上の一點に歸してしまふやうな、人生の極めて些細な、無意味な一茶飲事に過ぎないものだと云ふことに、氣が附いたのかも知れません。そして、ひよいと其處に湧いた空虚の感じと、寂しさの意識が、皆の奥底にある果敢ない氣持を起させたことだらうと思ひます。で、皆の顔色からそんなことを讀み取つたばかりでなく、實は私もそんな氣持がしたのです。

「すべてが運命の惡戯……」

その瞬間、五人が五人ともぢつと沈默したまま、そんなことをしみじみ思ひ浮べてゐるやうに見えました。

「然し考へて見ると、戀愛なんて結局つまらないものだ。」

と、Yは言はずにはゐられないと云つたやうな様子で、いきなりその重い沈默を破つてしまひました。が、皆はそれに答へようともしないで、やつぱり沈默を續けてゐました。

「だがねえ、君、僕の場合に於てさ、その時の女の心持つて一體どう云ふのだらう。どう考へても、わけが分らないんだ……」

暫くうつむいて考へ込んでゐたS中尉は、やがて思ひ出したやうに身を起すと、どうしても

解けない謎を持ちあぐんだやうにかう云ひました。

「そりやあ君、分つてゐるさ。女は屹度月經期だつたに違ひないよ……」

と、Mは苦もない調子で、はつきりと云つてのけてしまひました。

S中尉は幽かに苦笑しました。座は明かに白け渡りました。皆(みんな)の興味が戀愛問題を離れてしまつたのは、云ふまでもありません。

丁度十二時少し前でした。

（七年一月作）

青空文庫情報

底本：「新進作家叢書22　修道院の秋」新潮社
　1918（大正7）年9月6日初版発行
　1922（大正11）年8月15日13版
入力：小林徹
校正：伊藤時也
1999年11月29日公開
2011年4月21日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

S中尉の話

南部修太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/